

横浜市小学校社会科研究会

4 学年部会

研修会記録

第 5 号

令和4年 11月 2日

横浜市小学校教育研究会

会長 徳江 武司

横浜市小学校社会科研究会

会長 加藤 和之

同 学年部長 金井 伸一

【提案日時】

10月 5日 (水)

【会 場】

横浜市立 平沼小学校

提案 名畑 慧大 先生 (原小)

司会 八木 浩司 先生 (南吉田小)

記録 武藤 幸一 先生 (竹山小)

1 提案内容 単元名

単元名「疫病に屈することなく伝統を繋ぐ」～相模の大凧祭り～

2 提案者より

相模の大凧祭りを教材として取り上げた。地域の人々に受け継がれてきた行事であり、人々の努力や願いが学べると考えた。本気の学習問題が出る流れに必然性があつたかどうか課題を感じている。どうすればよかったか話し合いたい。

○視点① 「子どもの予想と見通しを大切にした単元づくり」

児童の姿から主体的に学んでいる様子が見られた。映像資料や大凧の大きさを体験する活動を取り入れた。学習問題を調べていくときに、Webを使うがなかなか知りたいうことにたどりつけない。検索ヒット率をあげる工夫が必要だった。

○視点② 「社会的事象の意味等に迫るために、協働的な学びを大切にした授業づくり」

大凧祭りは3年間も中止だったのに、Kさんは準備をし続けていったことに注目させたかった。どのタイミングで資料を提示できればよかったのか。教師主導にならない資料の提示の仕方を探っていきたい。

3 協議会

○視点①について

- ・本気の学習問題に行くための流れは・・・
- ・学習問題の追究→解決できていないところに戻る→深ぼり→本気の学習問題 (お金・人・かかった時間・数字) など→これからのことを考える→自分事になるという流れが大切ではないか。

○視点②について

- ・板書の構造化を図っていくと、話し合いが深まっていく。

＜講師の先生より＞ 高田小学校 菅野 雅樹 副校長先生

教師2年目で、ここまで教材開発をしていてすばらしい。この材を皆で共有すれば、市の社会科が充実する。

視点①に対しては、授業者が丁寧に子どもに寄り添っていることがわかる。

まとめは、「どのように」の答えになるように書かないといけない。「どのように」「なぜ」という問いは、答え方がそれぞれ違う。

板書の構造化をするとよい。思考の流れを書いていくことも大切だったが、子どもがじっくり考える時間をとることが必要だった。また、逆説でかえすような、子どもへの揺さぶりの発問も必要だった。そうすれば、話し合いが生まれる。普段から議論ができる素地づくりが必要だ。発言をつなぐ練習を日々行っていくとよい。そのとき、教師が待つことも大切。子どもの問いと、先生の言葉のずれが生まれてしまうため、子どもの言葉を教師が言い直さない方がよい。

本気の学習問題については、地域の人が互いの関係を大切にしていることに注目するとよい。本時の中で、教師が引き出していた。それにより子どもは変容していた。抽出児もKさんに寄り添えるようになっており変容している。

資料の選択や出すタイミングについては、答えはない。今回は資料がKさんの言葉だけだったので、複数の資料を出せるとよかった。大風祭りの実行委員の組織図に人数も入れると、関わっている人の多さがわかる。資料の中身が抽象的すぎる。しかし、具体的過ぎると議論が終わってしまう。抽象的すぎず、具体的すぎない資料がよい。

＜学年担当校長先生より＞ 西富岡小学校 黒田由希子 校長先生

大風祭りは、魅力的な材である。4年に一度開催では、地域で祭りの継承ができないから毎年やることにしたということ。また、地域がお金を出して準備してきたが、中止になったことでお金が返ってこなくなった。でも来年もお金を出すという事実注目するとよい。祭りの準備の中身である、お金・人・技術の事実をおさえることが重要である。地域のつながりを大切にしているという終末になるとよい。

＜学年担当校長先生より＞ 洋光台第一小学校 中村智 校長先生

教師2年目で市の提案をしていることがすごい。材もよかった。板書は、1時間の流れがすっきりとしていてふり返りもしている。抽出児も、ふり返りをかけるようになった。そのふり返りも学習した内容になっていった。本気の学習問題については、大風祭りを中止か、行うかを判断する内容にして、「この人は来年やると思う？」「どんな準備をすると思う？」という展開にしていくとよいと思った。その中で人材育成に注目するとよいと思った。

文責 山口 暁風 (小田小学校)